

兄さんの夏休みの友

「夏休みの友」とは私達が小学校時代、夏休みに宿題として渡され、毎日一頁ずつ勉強するようになっていたノートである。

昨夜寝てから、兄さんと私のエピソードを思い出して、一人でクツクツ笑い出してしまった。兄さんも私も剽軽者（ヒョウキン者）だった。私なんかは乱暴者に近くて「アン坊」と云われていた。

二、三才の頃、祖父が病気で床に伏せているのに走って行って腹の上に飛び乗る。とうとう堪らず増田（今の名取）のよし叔母に預けられた。叔父は駅の近くの宿舎を兼ねた東北電力の変電所で、保守の仕事をしていた。此処でも私は「アン坊」ぶりを発揮し、叔母達を困らせていた様だ。庭に電柱が高く積んである、その上に登り大きいのをやった。仙台に連れて行かれたときなどは、市電に危なく引かれそうになったこともあったそうだ。

祖父が亡くなるまでの一年近く、叔父叔母の世話になった。二、三才の頃で記憶に無く、物心付いてからから聞かされた事であるが、青年になつてからも、電柱が積んであった光景が淡く記憶の底に残っていた。

生家に帰り小学校に入る前年のエピソードがある。兄さん（雄一郎）はよく私をシズル（からかう）。お尻を出して「スンちゃん、スンちゃん此処痒いから

見てけさい」と言つて私の顔の近くに、お尻を突き出す。純粹な私(?)は顔を寄せ見ようとすると、兄さんは「プー」と一発ヤラカス。こんな事が何回かあつた、幼い私はどう思つていたか思い出せない。

夏休み中で兄さんは「夏休みの友」を開いて勉強していた。私は兄さんの前に行き、「兄さん兄さんケツツ(お尻)見てけさい」と、云うか云わない内に一発やらかした。兄さんがやった事を真似たのだ。

そうしたらどうだろう、柔らかくて大きいのが「夏休みの友」の開いている頁に大量に落ちてしまった。そして一目さん逃げ出した。近くの麦畑か桑畑に逃げ込み、何時間か隠れていた。

歸つてみると、さあ大変、母に怒られるは、兄に怒られるは、身が縮む思いだつたろう。母は「夏休みの友」をいくら拭いても、黄色になつて取れない。兄は泣くし困り果て、次の日学校に行き担任の先生に訳を話し、残つていた新しい「夏休みの友」を貰つたそうだ。

母から「すいず(臣市)も悪いが、ゆいずる(雄一郎)がいずばん悪い(一番悪い)」と二人して叱られた。昨夜思い出して吹き出した。私が大きくなつてから兄達から教えられた事であるが、幾分記憶にある。その兄二人とも、もう亡くなつてしまつた

今度お墓参りに行く時、この随筆持つて行つたらあの世から、怒るだろうか、許してくれるだろうか。